☆四旬節第5主日（3月29日）の聖書朗読☆　※主任司祭からのコメントがあります。

第１朗読（エゼキエルの預言 37 章 11～１４節）

主なる神はこう言われる。

わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。

また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。

わたしはお前たちを自分の土地に住まわせる。

そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる。

第２朗読　（使徒パウロのローマの教会への手紙　8 章 8～11 節）

皆さん、肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。

神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。

もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。

福音朗読　（ヨハネによる福音書　11 章 3～7、17、20～27、33a～45 節）

　そのとき、ラザロの姉妹たちはイエスのもとに人をやって、
「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。
イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。
神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」
イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。
　ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。
それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」
さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日も
たっていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、
マリアは家の中に座っていた。マルタはイエスに言った。
「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったで
しょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえて
くださると、わたしは今でも承知しています。」
　イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、
「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。
イエスは言われた。
「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。
生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを
信じるか。」
マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、
メシアであるとわたしは信じております。」
イエスは、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」
彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。
ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と
言った。しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なない
ようにはできなかったのか」と言う者もいた。
イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさ
がれていた。
　イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、

死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もう
においます」と言った。
イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、
言っておいたではないか」と言われた。

人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。
「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」
こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。
マリアのところに来て、イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。

足立教会のホームページをご覧の皆様へ（主任司祭より）

足立教会の皆さまこんにちは。主任神父の野口です。東京都から感染症の拡大防止のための土日の外出自粛要請が出ていますので。その趣旨をよく理解し、協力しましょう。東京の菊地大司教様からも感染防止に努力するよう通知が届いています。
これから迎える受難の主日、聖週間、復活徹夜祭、復活の主日は教会の典礼の中では最も荘厳で大切な日々ですがその式に参加できない状態になっています。残念なことではありますが、むやみに嘆くことなく主イエスの受難と死を黙想しつつ、現在の私たちの苦難に立ち向かうようにいたしましょう。
四旬節第五主日では冒頭に紹介された箇所が読まれます。

第一朗読 「エゼキエルの預言」

ここでは、「神は罪の墓の中に死んでいる私たちを、そこから引き揚げ、愛の息を私たちの中に吹き込み、生きる者とされた」ことが述べられています。洗礼とは罪の死からの蘇りなのです。私たちは当たり前のように考えている洗礼の恵みをもっと噛みしめる必要があります。

第二朗読 「使徒パウロのローマの教会への手紙」

現在世の中は新型コロナウィルスによって大変困った状況にありますが、今のイタリア・ローマでも苦しみが続いています。パウロ時代のローマではキリスト者たちの努力で教会が建てられ信者の数も増えていました。
そこにパウロは手紙を送って励ましているのです。

特にこの手紙では「人間が自分の力で神との正しい関係に入るのではなく、むしろ、自分の無力を認めてキリストを心から信じる者を、神がご自身との正しい関係に入れる（義とする）のである」ということである（フランシスコ会聖書研究所の解説より）とパウロは私たちに教えています。

福音朗読 「ヨハネによる福音」

ラザロの蘇りがテーマです。イエスの友人のラザロが急病で死にます。その時のイエスと周りの人たちの様子が描かれています。長いエピソードなので短くされています。この中で、人間にとって不可避な「死」ですが、ラザロの死を大変嘆かれたイエスの様子が語られています。肉体的な死をこれほどまで嘆かれ悲しみを露わにされたイエスは私たちの「永遠の死」「罪の中にとどまること」を黙って見過ごされることはできないのです。ですから、ご自分の死をもってでも私たちを買い戻し救いたいと、受難、十字架上での死に突き進まれます。私たちは愛する人のために死ぬことはあっても、自分に逆らい、無視し続ける人のために自分の命を捧げることはなかなかしえないのではないでしょうか。このイエスの私たちに対する愛をもっと黙想し、体感できるまでになりたいものです。今まさに世界は大変な苦しみの中に在ります。物理的に手助けを行うことはむつかしいでしょうが、この病気の苦しみの中に在る人々のために主である神に祈ることはできます。また、この病気の人を助けるために力を尽くしておられる人たちのためにも、寛大な祈りを捧げましょう。皆さまお大事に。